

研修プログラムと 参加者の学び

※氏名・所属は参加当時のものです。

※教員による原文を活かして掲載しておりますので、

一部、表現のばらつきがありますがご了承ください。

また、記載内容はJICAの見解とは異なる場合があります。

◆多様性を考えるセミナー② 学ぼう編（教師国内研修事前研修①）

日時：2022年7月16日（土） 13：00～18：30

実施方法：オンライン（ZOOM）

対象：教師国内研修参加教員 / 15：00より一般参加者（大学生・教員等）も参加

時間	プログラム	講師
13:00-13:30	JICAからの挨拶、プログラム説明	
13:30-14:00	自己紹介とSDGs概要説明	
14:00-14:50	参加型手法の教材づくりについての講義 (テーマ：SDGs)	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏
14:50-15:00	休憩	
15:00-15:05	指導者研修プログラム紹介	研修スタッフ
15:05-15:50	外国人集住地区における多文化共生についての講義 やさしい日本語についてのワークショップ	JICA 国際協力推進員 (旭川デスク) 藪たかね
15:50-16:00	休憩	
16:00-16:50	参加型手法についての模擬授業 (テーマ：多分化共生)	旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
16:50-17:00	休憩	
17:00-17:50	Globe についての講義 質疑応答	東川町立東川小学校 教諭 木村智美氏
17:50-18:00	閉会・アンケート	
18:00-18:30	振り返り	研修スタッフ

1 本研修の目的・SDGsについて (JICA)・参加者自己紹介 (関心のある SDGs)

本研修目的は2つあり、

- ① 「SDGs・多文化共生をテーマにした教材づくりの手法を学ぶ」
- ② 「道内外における多文化共生社会構築にむけた自治体の取り組みを学ぶ」です。

JICAの方々から「SDGsの意義」「MDGsからSDGsへの変遷」、2050年には高齢者の割合が7.3%から16.2%に増加すること、日本のGDPが8位になることといったデータを基にした「なぜSDGsへ取り組むか」というご説明があり、「よりよい社会づくりを実現するためには？」を改めて考える機会となりました。

2 参加型手法の教材づくりについての講義 (テーマ:SDGs)

(講師:千歳市立支笏湖小学校校長 東峰宏紀アドバイザー)

はじめにJICAからの期待のキーワードの1つである「主体的な行動力を養う」について、「主体的と自主的の違いは？」という問いかけがありました。「なすべきことを自分の意思に基づいて行う」という自主的に対して、主体的は「自分の意思と判断に基づいて行う」ことであるという上で、主体的な行動力を養うための教育として、「世界がもし100人の村だったら(開発教育協会発行)」「かわいそうなぞう(土家由岐雄著)」を例として

- ① 知識理解 (語句・キーワード)
- ② 概念理解 (文章による説明)
- ③ 共感的理解 (寄り添い、形にする)

という3つの理解が順番に達成されることが必要不可欠であるということでした。特に③共感的理解のための手立てとしては童話絵本化・ワークショップ・シミュレーション・カードゲーム・フォトランゲージなどの「参加型手法」を用いて模擬体験することで共感的理解が達成されるので、「参加型手法」の特性を把握した上で引き出しを増やし、授業のねらいや教材のねらいといった「何のための手法か」という考えに基づいた、アクティブ主義にならないような手法の取捨選択をできるようになってほしいとのことでした。

次に、参加型授業作りのポイントとして

- ① 「学び手が主体的である(学び手の気づきと発想が軸)学習」
- ② 「体験的活動を多く設ける」
- ③ 「受信と発信の双方向性が基本」

等であり、教員の求める役割は生徒自身による気づきや学びを促すことである「教えない、支援するファシリテーターに徹すること」ということでした。SDGsの授業に関しても、取り上げた内容、学びが世界と関係している、繋がっているということを実感できる(価値づけできる)学びにしてほしいという願いもありました。

3-1 外国人集住地区における多文化共生についての講義

3-2 やさしい日本語についてのワークショップ

(講師:JICA国際協力推進員 藪たかね推進員)

講師による外国人集住地区滞在時や帰国後の話・課題(経験したことのない不安や有難さ、数カ国言語が併
2022年度 JICA北海道 教師国内研修

用併記された看板、大人になりたくない子ども達の実態、日本人との交流が全くない状況、大多数の保護者が非正規労働者であるなど）を伺い、多文化共生や「やさしい日本語」について考え、イメージを膨らませました。

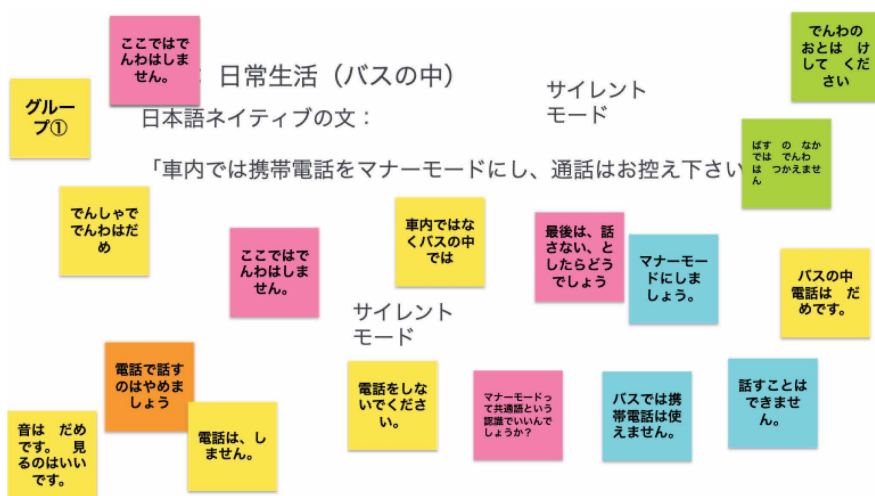
「やさしい日本語」の変遷として、1995年の阪神淡路大震災がきっかけであったことや外国人が希望する情報発信言語は「やさしい日本語」が76%でトップ（文化庁）であることを理解した上で、作り方のポイントとして

「はさみ」（は：はっきり さ：最後まで み：短く）があり、

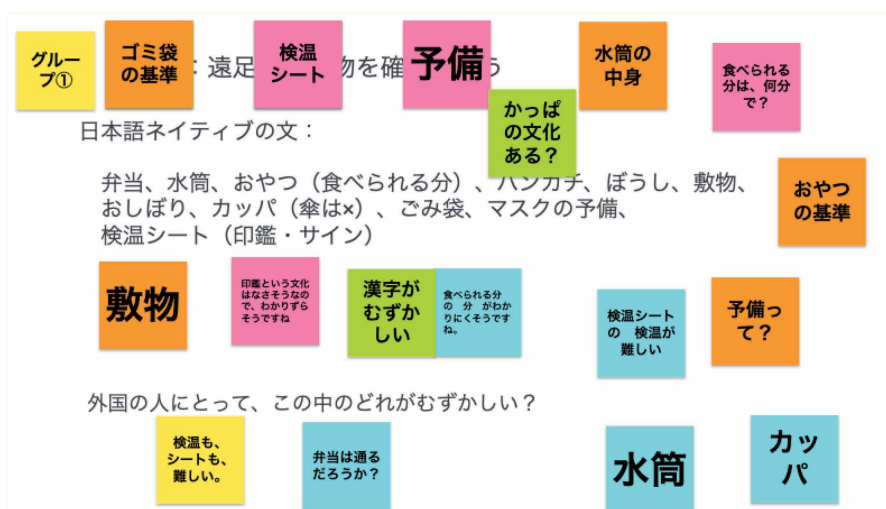
- ① 語彙を平易なものにする（漢字にルビを振る・カタカナ語の多用 NG）
- ② 文節で区切り・はっきり言う（曖昧な表現 NG）
- ③ 文を短くする・最後まで言う

といった内容が挙げられました。

その後、参加者がグループに分かれてジャムボードを使いながらブレインストーミングとKJ法を用いていくつかの例題に対して実際に「やさしい日本語」を作り、各グループで共有を行い、知見を深めました。



（資料①「車内では携帯電話をマナーモードにし、通話はお控えください」を「やさしい日本語」に変換するグループワークを実施した際のジャムボードの様子）



（資料②「遠足での持ち物連絡」を「やさしい日本語」に変換するグループワークを実施した際のジャムボードの様子）

最後に講師から「相手の背景を考え、気持ちに寄り添うことが大切。年齢や性別、障害の有無、国籍関係なく全ての人に優しい日本語に。そうすれば過ごしやすい日本にもなる。」という話がありました。

4 参加型手法についての模擬授業（テーマ：多文化共生）

（講師：旭川市立緑が丘小学校元教諭 塚田初美アドバイザー）

東峰アドバイザーが仰っていた参加型手法の1つであるクイズ作りを通して多文化共生を考えるという内容でした。日本に来た外国の子どもが困っていることを考え共有したり（ルールやマナー、食事、会話、授業等が挙げられた）、講師の体験談（タイのアパートのエレベーターに貼ってあった紙の話）や実際の授業の話（肌の色の違い）を伺ったことにより、外国の子どもと日本との繋がりについて考えるきっかけとなりました。

他には、各チームでエピソード（例1 転校してきたその日にフィリピンから来た女の子の生徒がピアスをしてきた）と先生の話や理由・背景（例1 フィリピンでは女の子が生まれると赤ちゃんのうちに「この子が幸せに育つように」と家族の願いが込められ、ピアスをする）を組み合わせ、幾つかの○×クイズ（例1 フィリピンの子どもがピアスをしているのは～からであるというクイズ。答えが×になるように～の箇所を考える）を作ったり、講師からのクイズに対して考え回答したり、実際に報道された多文化共生を目指す学校の運動会の様子を観ることを通して、他国との文化の違いを学んで納得して終了ではなく実際に行動に移して共感していくということの大切さを学びました。

5 Globe についての講義

（講師：東川町立東川小学校教諭 木村智美様）

日本初の町立日本語学校が設立されているなど、韓国・中国・ベトナムなどの様々な国の方々が住んでいる東川町が取り組んでいる「Globe」についてのご説明がメインでした。

- ① Local 要素・・・地域と日本の文化・伝統と良さの理解。自分自身の見つけ直し。
- ② Global 要素・・・世界の文化の良さの理解と共に日本の文化の良さの理解。他者尊重。
- ③ Communication 要素・・・英語を活用したコミュニケーションによる英語力向上。

「Globe」では幼児センター（ALT と外国語との触れ合い等）→町立4小学校（歌や踊り・遊びや数え方・スポーツや祭り等）→中学校（諸問題解決方法検討・発信等）→高等学校（どのように社会とかわるか）という流れがあり、「国際社会で活躍する人材育成」という共通目標のもと、各機関での目的・目標（目指すべき子ども像）と手段が明確に確立されており、上記の3要素のもとで行われる活動の中でも外国科と総合的な学習（探究）の時間と各教科の教科横断学習がプログラム・プロジェクト化されていて、地域と学校が連携されていることに驚きました。また、ただ単純にSDGsが関連しているだけではなく、ねらいに応じて地域の日本人や日本語学校の留学生、ALTの外国人材や開発教育の教材を活用しながら参加型手法を通して学んでいることもわかりました。

6 本研修を通して

SDGsや多文化共生をテーマにした教材づくりにおいて改めて学んだことが3つあります。

- ① 「目標・目的（ねらい）を実現するための手段ということを見失わないこと」
- ② 「実際の諸課題・諸問題を取り上げ、共感的理解を図ること」
- ③ 「目的実現のための手段として外部の活用・連携を図ること」

ということです。最上位の目標は「持続可能な社会づくり」「持続可能な社会づくりに向けて子どもたちが作り手として行動する」のもと、どうすれば実現できるか、單元ごとに目標を共通認識し、生徒を主語とした授業を生徒と共に創り上げる中で、様々な視点から考えたり、探究サイクルを行ったり来たり試行錯誤しながらも共感的理解を図ることで生徒が「自分が学んでいることが世の中に繋がっていることの実感」「自分でも世の中に貢献できることの実感」をできるように支え、手立てを講じながら伴走していくことの重要性を認識しました。

◆多様性を学ぶセミナー③ じぶんごとに編（教師国内研修事前研修②）

日時：2022年7月30日（土） 13：00～18：30

実施方法：オンライン（ZOOM）

対象：教師国内研修参加教員 / 15：00 まで一般参加者（大学生・教員等）

時間	プログラム	講師
13:00-13:05	指導者研修プログラム紹介	研修スタッフ
13:05-13:55	途上国での障がい者支援についての活動紹介、ワークショップ	特定非営利活動法人 「飛んでけ！車いす」の会 代表 吉田三千代氏
13:55-14:00	休憩	
14:00-14:50	道内の性的マイノリティ支援に関する活動紹介、ワークショップ	さっぽろレインボープライド実行委員会 委員長 柳谷由美氏
14:50-15:00	一旦閉会、アンケート	
15:00-15:10	休憩	
15:10-16:10	フィールドワークインタビューへのアドバイス 地域おこし協力隊の方への質問事項検討	旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
16:10-17:00	役割分担、フィールドワーク事前準備	
17:00-17:50	二風谷およびアイヌ文化教育についての講義	札幌大学アイヌ文化教育研究センター 教授 本田優子氏
17:50-18:20	振り返り	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏
18:20-18:30	連絡事項	研修スタッフ

【NPO 法人「飛んでけ！車いす」の会 代表 吉田三千代氏】

まず、私が研修を受ける前に思っていたことは、「なぜ、車いすなのに、飛んでけ！という言葉が付くのだろう…」ということである。

フォトランゲージという私にとって初めての形式の研修の中で、この法人は24年前から車いすを通して発展途上国への支援を行っていることを知った。これまでに81か国、3145台もの車いすを世界中に「飛んで」いかせたという。

現在、使われなくなった車いすの80%は廃棄されるそうだ。しかし、世界中には車いすを待っている人が7000万人程度いるといわれている。この法人では、使われなくなった車いすを収集し、整備し、引き取りのボランティアを行っている。また、「車いすの学校」を開催し、活動の輪を広げていることを知った。

【さっぽろレインボープライド実行委員会 委員長 柳谷由美氏】

私は研修を受ける前は、レインボープライドのことを全く知らず、恥ずかしながら何の研修なのかも分かっていなかった。時間になり、画面に現れた柳谷氏を見て、「おぉーカッコいい人だな!!」というのが第一印象。LGBTQなど性的マイノリティの支援として、居場所を作り、差別を解消し、啓発活動をしている団体だと知り、俄然として興味がわいた。なぜなら、目の前にいる生徒達が実際に、悩んでいる事柄だからである。

女子として中学校を卒業し、大人の男性となって連絡をくれた子、なかなか学校に足が向かず、養護教諭の先生あてに「私はQ…？」と手紙を書いた子、女子の制服にスラックスが導入され、顔の輝きが変わった子…北海道の端っこでも性的マイノリティに悩んでいる中学生をたくさん見てきた。

この子達（に限らず、全ての中学生）に、レインボープライドの活動を知ってもらいたいと思った。どれだけ多くの子が救われることであろう。

【二風谷およびアイヌ文化教育についての講義 札幌大学アイヌ文化教育研究センター教授 本田優子氏】

本田優子氏の講義を聞いて、まず初めに思ったことは、「本田教授の講義を受けられる学生が羨ましい」ということである。

私は無知である。本田教授の学生のように、アイヌの人口は実際の13,118人がいるとは思っていなかった。実際には、もっと多いというのだから驚愕である。しかも、その中でアイヌ語で会話しているのは、なんと0人！！ユネスコの消滅危機言語リストで最も深刻度が高い、というのだから大変なことである。「ごく少数のんびとが、いまなお伝統文化を守って生きている」という私がつけているイメージが二重の意味で勘違いされている、ということに驚いた。

私は今年の9月に修学旅行で初めてウポポイに行く。私の学校の生徒達もまた、私の持っているイメージに近いであろう。本田教授がおっしゃるように、「教師もほとんど学ぶ場がないので、教えることができない」ことが問題である。私はせっかく教師国内研修に参加できるのだから、この問題に向き合っていきたいと強く感じた。

◆フィールドワーク 1日目

日時：2022年8月6日（土） 8：30～20：30

実施方法：集合研修

参加者：教師国内研修参加教員

時間	プログラム	講師
8:30-11:00	集合～移動	
11:00-12:00	平取町立二風谷アイヌ文化博物館見学 (ガイドによる見学、チセを自由見学)	
12:00-13:00	お昼休憩（アイヌ料理のお弁当） 場所：同博物館内チセ	
13:00-14:40	体験学習（講和 60 分、舞踊 30 分） 萱野茂二風谷アイヌ資料館（10 分）	貝澤耕一氏
14:40-16:40	移動 平取町⇒浦河町	
16:40-17:00	ホテルへチェックイン / 休憩	
17:00-18:30	アイヌ語ワークショップ(オンライン) 場所：浦河ウエリントンホテル	ハポネタイ代表 惠原詩乃（UtaE）氏
18:30-19:00	移動 ホテル⇒うらかわ優駿ビレッジ AERU	
19:00-19:30	浦河町で働くインドの方々との交流 場所：うらかわ優駿ビレッジ AERU	浦河町で働くインドの方々
19:30-20:30	夕食 お弁当	

8時半。札幌駅に到着。集合場所を探す。あれ？いない？
実際には違う方を動いていたようだ。ミスドの確認をわすれ、ミスドの方に行くとちゃんと集合している。無事合流。

その後途中休憩しながら二風谷に到着。二風谷アイヌ文化博物館で早速所蔵されている資料のご案内をいただき、その後自由時間を



を経て、チセで食事・講話・舞踊の披露を見る。

自由時間にはトンコリの作成をしている様子を見た。その中で演奏の仕方を学んだ。自分はギターのようなものだと思っていたが、実際には、5弦の音階を生かして、音楽を奏でる。そして、誰が弾いてもその音は美しいものになる。不思議なものだった。



講話の中で、講師の貝澤さんの「全ては同じではない、違いを認めることこそ大切だ。」という言葉に改めて異文化交流の大切さと、認めあう心が大切であるということを感じた。二風谷にいた時間はわずかであったが、アイヌの人々の大切にしているもの、和人の考え方を押し付けられることで受けたアイヌの人たちの傷の深さ、そしてその



文化の美しさを改めて感じる事ができたと思う。萱野茂二風谷アイヌ

資料館にも足を運んだが、前に見たことがあったのと実際には時間が短かったこともあり、受付の人にさまざまな情報を聞いた。名字でその人がアイヌなのかそうでないのかがわかるという話があったが、実際に聞いてみると、まさにその通りで、萱野茂さんの家系図の中にある苗字は全てこの地域であればアイヌの人たちのものであるということ。アイヌだからどうこうということではないが、自分たちが教員として仕事を進める中で、当然その文化の衝突の場面が見えない中でも起きてくることもある、その際に注意しなければならないと認識した。



ホテルにつき、その後アイヌ語のプレゼンと外国人労働者の方の話を聞く。アイヌ語のワークショップについては、英語でもほぼ同じようなものだったが、自分の授業では時間短縮で無理して進めてしまう。そこは工夫しなければ、と感じた。インド人の労働者の方に話を聞いたが、この方々はざっくばらんに話をしてくれた。最後に「どこの牧場で働いているの？」と聞くと、誇らしげに答えていた。この人たちは本当に日本での労働を楽しんでいるのだろう。そして、文化理解ができている人たちの中で働いている。そういう人たちは今後の日本の労働環境を考えた場合に、本当に大事なことなのだろうと思う。忙しい1日だったが。充実していた。明日も頑張ろう。

◆フィールドワーク 2日目

日時：2022年8月7日（日） 8：30～20：00

実施方法：集合研修

参加者：教師国内研修参加教員

時間	プログラム	講師
8:30-9:30	馬の見学（希望者のみ） 場所：うらかわ優駿ビレッジ AERU	
9:30-10:30	前日の振り返り 場所：浦河ウエリントンホテル 会議室	
10:30-11:00	準備・休憩	
11:00-12:00	浦河町地域おこし協力隊の方への インタビュー 場所：浦河ウエリントンホテル 会議室	浦河町地域おこし協力隊 稲岡千春氏
12:30-14:00	昼食・自由時間	
14:00-15:00	外国にルーツをもつ児童へのインタビュー 場所：浦河ウエリントンホテル 会議室	細田 カズミ マヤラ氏
15:00-16:00	道内の外国人支援についての紹介/ 地域課題や学校現場でできることについてのデ ィスカッション	中標津町経済部経済振興課 主幹 神原誠司氏 中標津町地域おこし協力隊 レ ティ ルエン氏
16:00-19:00	振りかえりと教材の作成計画についての検討	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
19:00-20:00	夕食	

【馬を見に AERU へ】

・希望者は、馬を見にうらかわ優駿ビレッジ AERU へ。引退した競走馬やその他の馬が草を食べている様子が見学できた。

【昨日の振り返り】

- ・昨日のフィールドワークの振り返りを行なった。東峰先生がファシリテーターとなって進める。
- ・昨日の感想を漢字一字で表し、発表した。
- ・二風谷ダムのことについて～アイヌの人たちはダムの建設に反対だったが、ダムが雇用を生み出したこと、未だに二風谷の財政元となっていることから、一つの物事を多角的に見つめ、考えていくことの大切さを考えさせられた。これは、授業で扱って見たら面白いものが出来そうだが、下調べがもう少し必要だ。

【稲岡さんへのインタビュー】

- ・昨日のインド人労働者へのインタビューでは聞き出すことの出来なかったことについても教えてくださった。
- ・浦河に住むインド人の数に比べ、対応する職員の数に問題があり、稲岡さん自身もあと2人いてくれたらとおっしゃっていた。毎月100件の相談に対して一人に対応するのは、限界があるだろう。
- ・地域おこし協力隊の活動には、期限があり、稲岡さんがいなくなった後は、どのようになっていくのか、想像しただけでも多くの課題があることが見えてくる。

★「想像力」を持ってインド人の方と接して欲しいという稲岡さんの言葉が印象に残った。

【インタビュー1】

- ・ブラジルにルーツを持つ看護学生細田さんのパネルトークを行なった。
- ・これまでの21年間、様々な困難があったことがうかがえた。
- ・このような学生は、これから北海道にさらに増えていくと考えられる。学校でできる支援はなんだろう。ここでも「想像力」という言葉が出てきた。

**【インタビュー2】**

- ・中標津町で多文化共生に関する活動をされているお二人へのインタビューを行なった。
- ・日本人と外国人の交流の場がさらに増えればと話されていた。
- ・日本語があまり上手ではない、外国人が増えてきたら災害の際などには、支援が必要になってくるだろうという課題も出されていた。
- ・目指す共生社会では、新たな仕組み、システムの創造が必要になってくる。

【授業への準備】

- ・大まかな授業の流れを各自で考えた。今回の振り返りは、2文字の熟語で。だんだん文字数が増えている。今回は、四字熟語で表すことになるかもしれない。私は今日何度も出てきた「想像」という2文字を選んだ。

【個人の感想】

2日目のフィールドワークでは、「想像力」と「創造力」がキーワードになってくると感じた。誰かと交流する際には、目に見えることだけではなく、その裏にあることについても想像することが不可欠である。誰しも見たいものだけを見て、自分の勝手な判断で物事を考えてしまうことが多いのではないだろうか。相手の立場に立ち、一緒に物事を考えて接することが共生社会において必要なことである。

◆フィールドワーク 3日目

日時：2022年8月8日（月） 9：00～18：00

実施方法：集合研修

参加者：教師国内研修参加教員

時間	プログラム	講師
9:00-10:00	取材素材のとりまとめ 場所：浦河ウエリントンホテル 会議室	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏
10:00-11:30	個人ワーク 場所：浦河ウエリントンホテル 会議室	旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
11:30-12:00	協力隊体験をもとにしたワークショップ 場所：浦河ウエリントンホテル 会議室	JICA 北海道センター（帯広） 国内協力員 北原貴子
12:00-13:00	昼食 場所：浦河町内ネパールカレー店	
13:00-14:00	指導案についての共有 (関連する SDGs ゴールについても発表)	
14:00-18:00	移動（札幌へ）	

フィールドワーク3日目は、この2日間で学んできたことを各自でまとめ、それを教材化した指導案の作成が主な活動となりました。

各個人で指導案を作成する時間では、アドバイザーの東峰先生と塚田先生からのアドバイスに加え、JICAのスタッフの皆さんから経験談などを聞かせていただき教材化に向けて思考が深まりました。指導案交流では、それぞれの先生方が熱のこもった発表を行いました。積極的に学びにきている先生方が集まったときの熱量はすごいものだと感じさせられました。

指導案の検討では、校種・教科をはじめとしたバックグラウンドの違う先生方からの質問や意見がとても新鮮で学びの多い時間となりました。



JICA北海道センター（帯広）の職員であり、元JICA海外協力隊隊員の北原さんの経験をもとにしたワークショップでは、「多文化共生」をテーマに多くのことを学びました。インドで感じた、日本人の感覚とインド人の感覚の違いを例に、文化が違うと考え方が大きく違うことがあるとわかりました。

「よかれと思ってやっても相手と自分は違うもの。私が〇〇してあげるという考えでは、上から目線になり、本当の意味で相手を理解することができない。相手の立場に立って考えることが大切である。」という北原さんの言葉が一番印象に残りました。これは、異文化間だけではなく、人間の根本としてとても大切な感覚だと改めて考えさせられました。

この3日間の研修を通して、多くのことを学ぶことができました。1番に感じたのは、JICA、JOCAのスタッフとアドバイザーの皆さんの熱意です。これからの世界で活躍する児童・生徒達の前に立つ教員に学んでほしいと強く願っている熱量がひしひしと伝わりました。その熱意に講師の方々が応え、充実した研修プログラムになったと思います。教員だけの研修ではなく、外部の機関が関わる研修では、我々教員が普段学ぶことのできない内容がたくさん詰まっていたとても有意義な経験となりました。教育活動に熱意のある先生方と交流できたのも大きい経験となりました。校種を越えての活動が、深い学びになることが実感できた3日間でした。

◆教師国内研修事後研修①

日時：2022年10月8日（土） 13:00～18:00

実施方法：対面 / オンライン（ZOOM）

対象：教師国内研修参加教員

時間	プログラム	講師
13:00-13:10	研修スケジュール説明	研修スタッフ
13:10-14:00	指導案発表	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏
14:00-14:50	指導案検討会	旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
14:50-15:00	休憩	
15:00-16:50	指導案検討会	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
16:50-17:00	休憩	
17:00-17:50	指導案検討会	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
17:50-18:00	提出物・次回研修の案内	研修スタッフ

事後研修①

2022年10月8日(土) 研修日記

※オンラインで実施

北海道知内高等学校 教諭 西川佳希

【指導案検討会】

今回の研修を終えての感想は、学校の先生方からたくさんの学びがあったと思います。現在自分は高等学校に勤務しており、今までは小学校や中学校の先生方とお話しさせて頂く機会があまりなかったのですが、生徒に伝えたいと思っている点ではみんな同じで、その方法を相手によって変えているんだなと感じました。それは今回のSDGsを新しい世代にどう伝えるかということは重要な事であると考えています。

SDGsの17の目標の中で私のテーマは10と11です。人や国の不平等をなくすこと。住み続けられる街づくりをすることです。今回は研修に参加されていた他の先生方の手法を知ることが出来て大変参考になりました。

具体的には現在私が勤務している知内高校のある知内町には、人材確保のため、たくさんの外国人労働者の方々がいらっしゃいます。その方々と一緒に生活や仕事を行っていくためにどのような配慮や理解が必要なのかを生徒に知ってほしいと思っています。そのための方法を今回参加されていた他の先生方に相談させて頂き、考えがまとまり、生徒に授業が出来るところまでたどり着くことが出来ました。

まだまだ新型コロナウイルス感染症の影響もあり、町の中でもなかなか実際に交流する機会も場所も用意するのが難しい現状ですが、今回の研修のように先生方とも話し合いアイデアを出して、生徒たちに少しでも伝わる授業づくりのために努力していきたいと思っています。

◆教師国内研修事後研修②

日時：2022年11月5日（土） 13:00～18:00

実施方法：対面 / オンライン（ZOOM）

対象：教師国内研修参加教員

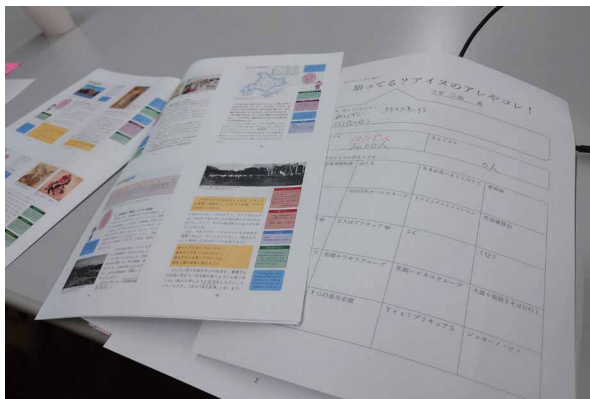
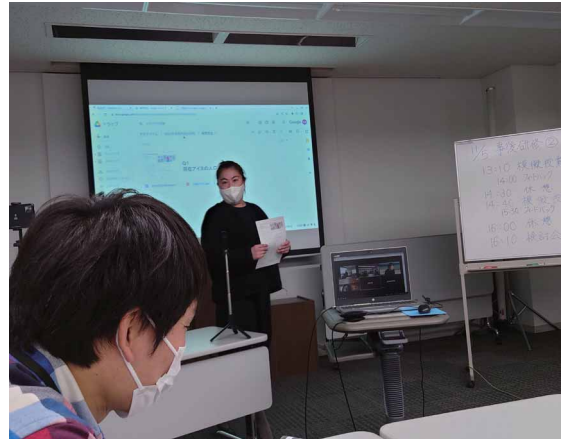
時間	プログラム	講師
13:00-13:10	研修スケジュール説明	研修スタッフ
13:10-14:00	模擬授業① 「知ってる？アイヌのアレやコレ!!」	網走市立第一中学校 梶野教諭
14:00-14:30	フィードバック、指導案検討会	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
14:30-14:40	休憩	
14:40-15:30	模擬授業② 「言葉に秘められた民族のメッセージ」	八雲町立落部中学校 土田教諭
15:30-16:00	フィードバック、指導案検討会	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
16:00-16:10	休憩	
16:10-18:00	指導案検討会（5名×20分、指導案の変更点を確認、アドバイザー、参加者からコメント）	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏

今日は実習の成果を見る2回目。参加できない先生もいらっしゃいましたが、オンラインでの参加2名、対面での参加3名(のち4名)で始まりました。

今回は実際に梶野先生と土田が模擬授業を行ないました。

梶野先生の模擬授業は修学旅行前に行なった事前授業の内容でした。実際に二風谷アイヌの様子から、これから訪問するウポポイの事前学習になる形で授業を行っていました。インパクトのある入りからその時研修で得たものを生徒たちに紹介し、その上でクイズを作り、みんなで出題する形で授業をまとめていました。この後行なう自分の模擬授業とは生徒のテンションの上がり方ととりつき方がまるで違うものになっていたと思います。

生徒たちはこの授業を受けて、ウポポイでさまざまな調査をしようとして張り切って出掛けていったのではないかなと思います。実際の授業は見てはいないのですが、問題作りは梶野先生の技と仕掛けで、実際に興味を持ってできたのではないかなと思います。



土田はアイヌ語に関する授業を行ないましたが、正直梶野先生の授業に押されていたので、模擬授業に参加くださった皆様にはどういうふうに映ったんだろうな、と気にはなっています。(正直うまくは行っていませんでしたが)ぜひ反応は他の先生方に聞いてください。テンションは低めに入っていますので…。

まだ授業実践が残っている先生、そしてすでに終了された先生とさまざまですが、残りの研修は12月の成果発表会の1回のみ。ラストスパート。頑張りましょう。



◆教師国内研修成果報告会

日時：2022年12月17日（土） 10：00～17：30 ※リハーサルの時間含む

実施方法：オンライン（ZOOM）

発表者：教師国内研修参加教員

対象：一般参加者（大学生・教員等）

時間	プログラム	発表者
10:00-13:00	報告会リハーサル	
13:00-13:20	成果報告会スタート 国内研修概要報告	北海道静内高等学校 教諭 内田大資
13:20-13:25	休憩	
13:25-14:15	模擬授業 「ダムについて～開発と環境と人間の生活～」	札幌市立太平中学校 教諭 奥山渉
14:15-14:35	授業者による自己評価、フィードバック	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
14:35-14:40	休憩	
14:40-15:10	教材紹介①「私たちの当たり前」	苫小牧市立沼ノ端小学校 教諭 渡部宏美
15:10-15:40	教材紹介② 「言葉に秘められた民族のメッセージ」 教材紹介③ 「私が共生社会を築いていく」	八雲町立落部中学校 教諭 土田賢 北海道池田高等学校 教諭 米家直子
15:40-16:10	教材紹介④ 「知ってる？アイヌのアレやコレ!!」 教材紹介⑤ 「外国人との共助 -多文化共生×減災-」	網走市立第一中学校 教諭 梶野有美 北海道静内高等学校 教諭 内田大資
16:10-16:30	アドバイザーからのコメント 成果報告会 終了	千歳市立支笏湖小学校 校長 東峰宏紀氏 旭川市立緑が丘小学校 元教諭 塚田初美氏
16:30-17:30	研修全体を通しての振り返り	

12月17日にオンラインで成果報告会を行ないました。40名以上の参加申込みをいただきました。

まず、内田先生が概要報告を行ないました。多文化共生をテーマとしていたため、様々な背景を持つ方について学ぶ機会を非常に多くいただいたことや、フィールドワークで行うインタビューの準備など、研修内容について紹介していただきました。多文化共生の教材化に当たっては、それなりの「覚悟」が必要だと内田先生が強調されていたことが印象に残りました。

その後、奥山先生が模擬授業を行ないました。「札幌にある大きなダムは？」「ダムは何のためにある？」という質問からスタートし、「ダムのメリット・デメリット」を考える時間を取りました。中学生にとっては、デメリットを考えるのが難しかったそうで、「お金がかかる」「建築に時間がかかる」「広大な土地が水に沈む」などの意見が出た一方、「環境破壊」という発想は出なかったそうです。

上記のように導入でダムについて興味を喚起した後、参加者も交えてロールプレイングゲームを行ないました。ブレイクアウトルームを利用して、それぞれの役割を確認したり、合意形成のためのグループワークを行ったりしました。「本当にダムは必要なのだろうか」「今ある産業を育てるという視点が大事だ」「でも水が枯れて、農業ができなくなったらどうするのか」など様々な意見交流がありました。

ロールプレイングを初めて実践したという奥山さんからは「中学生は、意外とフラットに役割に入ってくれた。白熱したチームもあったが目先の利益を優先する意見も目立った。また、現実的ではない意見が出る一方で、『多数決でものごとを決める民主主義は、悲しい思いをする人が出る』というコメントが出たりするなど、生徒が自分で考えようとしたことが伝わって来ました。『物事の側面に、メリットとデメリットがある場合は、メリットがあるからまず行動してみたら良いという考え方が、環境を破壊して来たのではないか』という意見もあった」などの紹介がありました。

参加者からは「現実的な社会を考えた時、役割の人数比はどうか」「農家や漁師には見返りの補助金やゼネコンには利益があるから、反対派が最終的には1人になってしまうのでは」という疑問や「対話する経験を積んで良かったのではないか」などの感想が出されました。

模擬授業後にアドバイザー塚田先生からは、「授業を実際に拝見したが、子ども達が意見を積極的に話して印象に残りました。理科では自分ごととして考える場面がなかなかないので、今回は挑戦的な取り組みでした。経済発展と自然保護を単純な対立として捉えない教材だった点がすばらしく、子どもたちの意見の変容などをふりかえり確認するとさらに深まったのではないかと思います。この授業を通して『誰一人取り残さない』ということの難しさを生徒は実感できただろう」とコメントをいただきました。

模擬授業の後には、それぞれが教材紹介を行ないました。教材紹介①では、「私たちの当たり前」と題して、子ども達の実態から授業作りを行なった過程が渡部先生から紹介されました。

「文字」を学ぶことにスポットを当てた授業で、冒頭で「もし、明日から学校に来なくても良かったら？」という質問から関心を持たせ、文字が読めないと命に関わることもあることが理解できるアクティビティを展開を行ないました。アドバイザーの東峰先生からは「アクティビティの途中で英語を入れることによって、さらに児童の興味が高まるなど、細かな工夫がたくさんあった。フィールドワークの成果もうまく取り込んでいて、現実的な教材として価値がある」との評価をいただきました。

その後は、校種別にわかれて授業紹介を行ないました。それぞれ参加者から、ご質問やご感想をいただき、対話の時間も確保された充実した時間となりました。オンラインということで、様々な状況に備えて、注意深くフォローし続けて下さったスタッフの野々垣さんはじめ、ご協力くださった方々のおかげで無事、成果報告会を終了できました。

最後に、これまで伴走して下さったアドバイザーの先生方、JICAスタッフのみなさんに、こころからの感謝をお伝えしたいです。現場にいと、目の前の業務に忙殺され、最も重要な業務である授業準備に時間を取る

ことは容易ではありません。そうした実情に寄り添いつつ、研修参加者を励まし続けて下さったことに、あらためて心からの敬意を表します。

